

檜隈寺周辺の調査

—第172次

1 はじめに

本調査は、キトラ古墳周辺に計画された国営飛鳥歴史公園の整備にともなう発掘調査である。調査は国土交通省の委託を受け、2008年度から実施しているもので、今年度はその4ヵ年目にあたる。今回の調査では、檜隈寺伽藍跡南方の、丘陵東裾（A区）と丘陵上（B区）の2カ所に調査区を設定した。A区は、昨年度おこなわれた第164次試掘調査（試掘区4：『紀要 2011』）において石敷（SX935）を確認したため、その全容をあきらかにすべく調査範囲を設定した。この際、調査区を第155次（7区：『紀要 2009』）調査区に繋げる形で設定し、丘陵頂部から裾部にかけての土層状況を確認することも目的の一つとした。B区は、公園施設の建設計画を受けて調査区を設定したもので、計画地の一部には、かねてより、建物の土壇跡と推測されていた高まりが所在する。B区も第155次（7区）調査区を広げる形で設定したが、調査区北端で遺構を確認したため、拡張区を設けつつ調査区の一部を埋め戻しながらの調査とした。調査期間は2011年10月20日～12月2日、調査面積は計402㎡である。

調査区一帯は、古代には渡来系氏族が多く居住した地域として知られ、なかでも檜隈寺は渡来系氏族である東漢氏の氏寺とされる。過去の調査においても、渡来系要素の強い遺構が確認されている。檜隈寺は高取山から北西方向に派生する丘陵頂部に立地し、現在は、阿知使主を祭神とする於美阿志神社の境内地になっており、その塔跡には、様式と塔心礎納入物から平安時代後期の作と考えられている十三重石塔（重要文化財「於美阿志神社石塔婆」）が建つ。

檜隈寺に関しては、奈文研がおこなった檜隈寺第1～4次調査で、金堂・講堂・西門・回廊といった主要堂塔を確認しており、伽藍主軸が北で23～24°西に振れることや、西を正面にすることなど、地形に制約された特異な伽藍配置をとることが判明している（『藤原概報 10～13』）。これらの建物の造営時期は出土遺物から、金堂・西門が7世紀後半、それにやや遅れて講堂・塔が7世紀末とされている。しかし、檜隈寺周辺では7世紀前半の

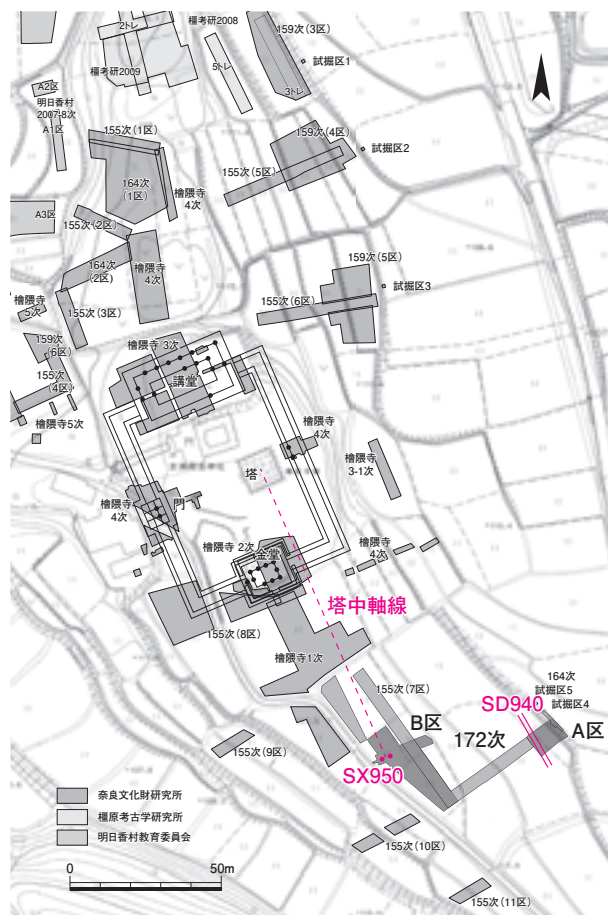


図176 第172次調査区位置図と主な遺構 1：2500

瓦が出土することから、前身寺院の存在が想定され、第159次調査（『紀要 2010』）3区の南北溝SD870や6区の堅穴建物SB910など7世紀前半～中頃に遡る遺構も確認されている。

2 各調査区の概要

A 区

檜隈寺金堂南東方の丘陵東斜面において、第155次7区東端から第164次試掘区4までを繋げて調査区を設定した。調査面積は86㎡である。2面の棚田が位置する斜面地であるため、基本層序の深さは一定しないが、①表土（耕作土：15cm）、②棚田造成土（45cm）、③暗褐色粘質土（造成土：15cm～45cm）、地山の順である。ただし、斜面裾の平坦部分では、③の下位に④マンガン濃集層（3～5cm）、⑤橙色粘質土（5～10cm）、地山となる。

検出した主な遺構は、石敷、素掘溝である。

石敷SX935 昨年度検出した、石敷と考えられる遺構である。⑤層を掘り下げた地山面に敷設され、人頭大の石



図177 A区全景（北東から）

の上面を平坦に揃えている。今回新たに、南西側斜面際までの敷設状況と、斜面際の石敷南西端に縁石と想定される立石状の一回り大きな石を確認した。この立石は偏平で、平坦面を北～北北東に向けて配され、背面側は斜面地山との間に小石の混じる褐色土があり、裏込の可能性がある。石敷および石が集中する範囲は東西幅約2mで、立石平坦面の向きからみて、本来の遺構は北側にさらに広がりを持っていたものと考えられるが、北東側水田の開墾にともない削平されたとみられ、遺構の全体像および性格は不明である。

石敷の直上・直下から出土した土器片は、昨年度調査のものも含めて6世紀後半から7世紀前半までの時期幅に収まり、石敷の時期を知る手掛かりになる。

素掘溝SD940 調査区の南西端で確認した素掘溝であり、北で西に32°の振れで、底部の標高にもとづくと南東から北西に流れていたとみられる。長さ6.5m分を確認し、溝の幅は1.7m、深さ60cmが残存していた。地山を掘り込んでおり、埋土の状況は地山が混じった暗橙色粘質土で、水が流れた痕跡は確認できない。石が混じるが、石組や石貼りをうかがわせるほどではない。6世紀後半から7世紀前半までの土器や、銅鉾が出土した。

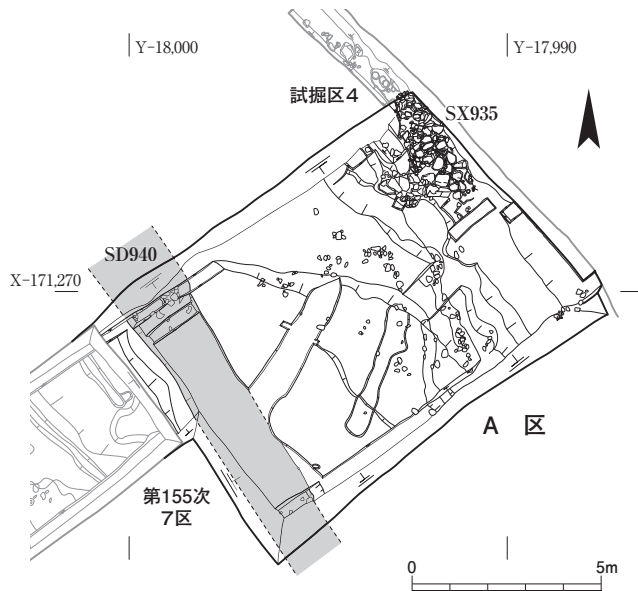


図178 A区遺構図 1:200

このSD940について北への延長を想定すると、檜隈寺中心伽藍東側に向かい、その手前に檜隈寺第4次調査区（東側小トレンチ）が所在するが、同様の溝は確認されていない。しかし、棚田の平坦面のみ断続的に調査しているため、調査区の中にSD940の延長部分が遺存する可能性が残る。また、過去の丘陵東斜面の調査では、丘陵北東部になる第159次調査3区で素掘溝SD870（幅80cm、深さ20cm）を、4区で素掘溝SD886（幅1m、深さ15cm、調査区東突出部）を検出している（『紀要2010』）。両者は直線的に繋がるものではないが、ともに北で西に21°振れ、丘陵東側斜面裾と平行に延びる。SD870では飛鳥Ⅱの土器、格子目叩きの瓦が出土していた。今回のSD940は、これらとは方位の振れや規模が異なるものの、いずれも現存する中心伽藍遺構が成立する7世紀末以前に、丘陵東側を区画する遺構と考えられる。

B 区

檜隈寺金堂南東方の丘陵上において、第155次調査7区を拡張する形で調査区を設定した。調査区の北半は土壇状の高まり部分で、南半は旧水田耕作地の平坦部分である。調査面積は316㎡。調査区内のほとんどで表土（耕作土：15～40cm）を除去すると地山が露出する。

検出した主な遺構は柱穴2基で、ほかに第155次調査で検出した中世の土坑SK811西端部とこれにともなうとみられる土坑、近代の耕作溝、小穴などを検出した。

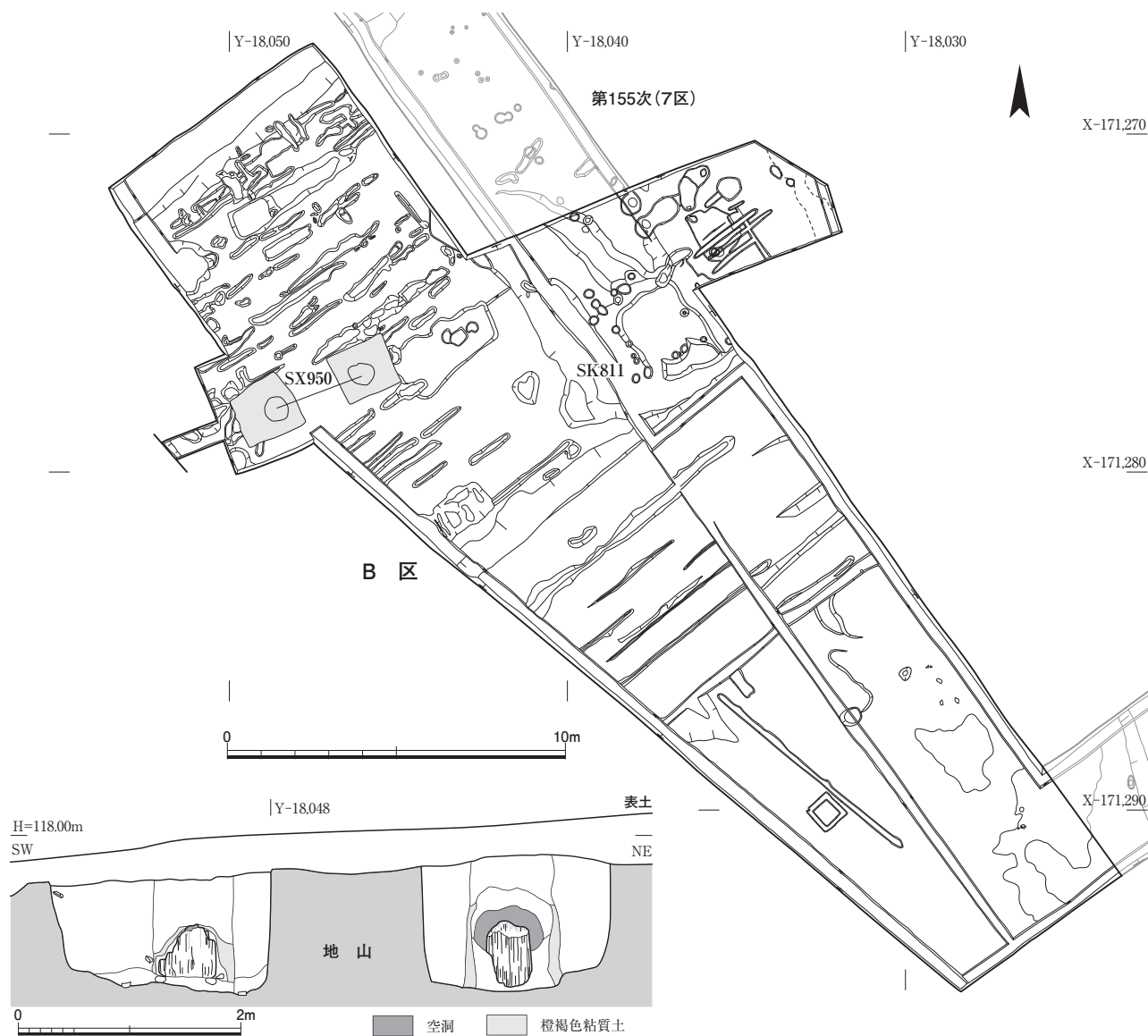


図181 SX950断面図 1:60

図180 B区遺構図 1:200



図179 B区全景(北東から)

柱穴SX950 土壇状の高まり部分で検出した東西に並ぶ柱穴2基である。これらは検出状況から対になる関係と考えられ、掘方埋土は地山の土を主体とした暗赤褐色粘質土で共通し、柱根が残存していた。検出面では柱痕跡が確認でき、柱痕跡を掘り下げると空洞を経て柱根を確認できた。柱痕跡および柱根の状況から見て、柱はほぼ垂直に立っていたと考えられる。また、掘方埋土と柱根との間には、厚さ10cm程度の橙褐色粘質土が確認でき、根巻の可能性はある。

東側の柱穴は掘方の長辺1.8m、短辺1.5m、残存深さ1.2mで、柱痕跡は直径65～75cmである。柱根は高さ60cm、直径64cmが残存し、地山に直接据えていた。西側の柱穴

は掘方の長辺1.8m、短辺1.7m、残存深さ1.1mで、柱痕跡は直径70～75cmである。柱根は高さ45cm、直径65cmが残存し、掘方底部に瓦片と石を含む粘質土を敷いて据えていた。東西柱根の柱間心々距離は2.7mであり、心々線を結ぶとその方位は東で北に振れ、檜隈寺中心伽藍の方位の振れ（東で北に23～24°）にほぼ一致する。また、この檜隈寺の方位の振れにしたがうと、7世紀末に整備された塔跡あるいは平安後期の十三重石塔の南北中軸線がSX950の柱穴間を通る（図176）。

柱根の外周側面は腐蝕とその後の粘土化が進んだとみられるが、底面にはヨキ加工痕がわずかに残る。樹種はケヤキである。掘方埋土から10世紀前半から中頃の土師器が出土した。

遺構の性格は、伽藍配置に沿った計画性が認められることと、2本の柱が立つだけの構造から、屋根が架かるような建造物ではなく、門や幢竿支柱などの可能性がある。しかし、門に続く塀や区画などが見つかっていないので、現状では幢竿支柱であると考えられるが、詳細については後述する。（黒坂貴裕）

3 出土遺物

瓦磚類 第172次調査区からは、軒丸瓦1点、軒平瓦3点、丸瓦84点（10.44kg）、平瓦337点（41.39kg）、鴟尾1点、ヘラ描き平瓦1点が出土している。軒平瓦では、重弧文の第Ⅱ型式が2点（四重弧文のE種1点、種不明1点）、右偏向唐草文の第Ⅲ型式Aが1点ある（以下、型式名については、花谷浩「京内廿四寺について」『研究論集Ⅺ』奈文研2000に準拠）。軒丸瓦では、弁端が角張り、弁端の反転を丸い点珠によって表現する素弁十一弁蓮華文軒丸瓦が1点ある。この資料は、飛鳥寺第Ⅲ型式と同範であり、檜隈寺では初出と



図182 第172次調査出土軒丸瓦 1：4

なる。飛鳥寺第Ⅲ形式は、作範当初のⅢa型式と、蓮子と間弁が掘り直された後のⅢb型式に分類されるが、本資料は中房部分が欠失しているため、飛鳥寺Ⅲa・b型式のいずれに該当するかは不明である。

鴟尾については遺存状態が悪く表面の大部分が剥落しているが、鰭部分であると判断した。これまで檜隈寺の発掘調査では、1979年第1次調査で1点（『藤原概報10』）、2008年第155次調査で3点（『紀要2009』）の鴟尾が出土しているが、今回の出土資料は、成形の状態、胎土・焼成などから第1次調査のものに近似している。（渡辺丈彦）
銅 鋳 素掘溝SD940より出土。全長1.6cm、頭部径0.6cm、脚部径0.2cm、重さ1.1g。頭部断面は円形、脚部断面は方形を呈す。脚部は、頭部中心からずれた位置に取り付く。

（木村理恵）

土 器 土器は整理用コンテナ2箱分が出土した。大半は中世以後の土器で、一部古墳時代、古代の土器を含む。ここでは遺構に関連する土器を報告する。

1は土師器杯A。柱穴SX950西側柱穴掘方から出土した。口縁部を幅狭くヨコナデするe手法で調整する。器壁が薄く、外面に指オサエ痕跡が残る。復元口径12.5cm。10世紀前半から中頃と考えられる。2～4は須恵器杯Hである。2は南北溝SD940出土。口径が小さく、底部はヘラ切り未調整である。飛鳥Ⅰ。3は石敷SX935周辺から出土した。立ち上がりが高く、端部は丸くおさめる。底部をヘラケズリで調整する。TK43型式である。他に石敷SX935周辺からは飛鳥Ⅰの須恵器杯H片が出土した。4はA区斜面の暗褐色粘質土底面から出土。口径が大きく、口縁端部にゆるやかに内傾する面を持つ。TK10からMT85型式に位置づけられる。（小田裕樹）



図183 第172次調査出土銅鋳 1：2

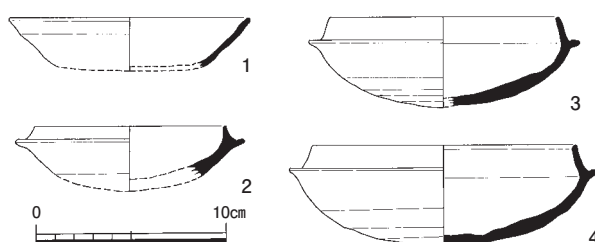


図184 第172次調査出土土器 1：4

4 幢竿支柱について

幢竿支柱とその構造 今回の調査で確認された大型柱穴2基で構成されるSX950は、前述のように幢竿支柱であると考えた。幢竿支柱とは儀式にともない空間を荘厳するために幢幡（旗）を先端につけた竿を支える柱である。寺院・宮殿跡に検出例があり、構造的な分類が福田信夫¹⁾によって示されており、その分類を高田康成²⁾が図示し、事例を収集している。この分類にしたがえば、独立した2基の柱穴によって支柱（幢竿）を支える構造として、SX950はD類に該当する。

しかし、2本の柱によって構成される建造物としては、門や鳥居も想定される。西隆寺SX850（『紀要 2001』）は、1基の柱穴に2本の支柱を立てるC類に分類される遺構である。しかし、西隆寺の場合は、幢竿支柱とともに門も想定しているが、これは子院の区画が想定される位置で検出しているためである。

また、鳥居は平安時代には寺院でも盛んに建てられていたが、現存遺構で建立年代が遡るものは石造が多く、木造の事例は窪八幡神社鳥居（重要文化財（以下、重文）、山梨、天文4年：1535）まで年代が降ってしまう。窪八幡神社鳥居³⁾は、柱径54.5cm、柱間心々距離5.9mである。これにつづく建立年代の木造鳥居は日牟礼八幡宮鳥居（県指定、滋賀、元和3年：1617）で、柱径73cm、柱間心々距離6.7m。これら以降、柱間が狭くなる場合も含めて、柱径と柱間寸法は概ね比例関係にある。一方、石造鳥居は平安時代と推定される遺構が現存し、例えば成沢八幡神社鳥居⁴⁾（重文、山形、平安後期）は柱径99cm、柱間心々距離2.4mと、柱径の太さのわりに柱間が狭く、今回のSX950の特徴に類似する。しかし、建立年代が判明している四天王寺鳥居⁵⁾（重文、大阪、永仁2年：1294）のように、柱径112cm、柱間心々距離7.4mと規模の大きな事例も存在する。さらに、地域性もうかがえることから、石造鳥居についての寸法体系は見出しがたい。石造鳥居と木造鳥居に、柱径と柱間寸法に関して共通した関係性を看取することは難しく、現状では石造鳥居を参考とすることはできないといえよう。

ここまでみたように、幢竿支柱と門・鳥居の区別については、寺院における配置、柱の太さと柱間寸法などが手掛かりになると考えられる。檜隈寺の場合は、柱の太

さに対して柱間寸法が狭く、寺院を区画する計画性も認められないため、現状では幢竿支柱と判断される。

幢竿支柱設置年代と檜隈寺 幢竿支柱SX950は、柱穴掘方出土の土師器から、10世紀前半以降に設置されたと判断できる。この頃の檜隈寺はこれまでの調査によれば、金堂SB300は9世紀頃に衰退し、12世紀頃には廃絶していたと考えられ、講堂SB600については、平安時代後期（11～12世紀）に瓦積基壇を玉石積基壇に作り替え、14～15世紀までには廃絶している。塔SB400は、十三重石塔の推定年代から平安時代後期までに廃絶していることになる。以上の状況からは、檜隈寺でSX950が設置される契機の下限は、講堂基壇改修や十三重石塔建立といった平安時代後期までにしか求めることができず、これ以降の檜隈寺は衰退したと考えられる。したがって、SX950が設置される時期は、平安時代中期（10世紀前半以降）から平安時代後期までと考えられる。そしてその頃は、7世紀後半～末に整備された中心伽藍は、かろうじて維持されていたとみることが可能である。そのため、SX950の設置が平安時代中期であれば、7世紀末に成立した伽藍配置に基づいて計画されたと考えられ、平安時代後期であれば、7世紀末の伽藍配置を基盤としつつも十三重石塔を中心とした伽藍配置に基づいて計画されたものと考えられる。

幢竿支柱の計画と伽藍配置 SX950の配置計画の基準は、7世紀末の伽藍配置に基づく以下の2通りの可能性があり、それぞれ幢竿支柱の類例があげられる。しかし、現状でいずれかは判断しがたい。

①塔の中軸線上

塔の南北中軸線（北で西に23～24°振れる）がSX950の2基の柱穴間を通ることから、塔あるいは十三重石塔を基準として設置されたと考えられる。この場合、SX950の東側に同様の遺構が存在しないため、2本の支柱に支えられた1本の幢竿が立っていたことになる。塔を基準として設置されたとみられる事例としては、山田寺⁶⁾（SX401・402：7世紀後半、SX014：8世紀後半）、本薬師寺（SX277・280・370：7世紀末）（『藤原概報 26』、『年報1997-II』）、武蔵国分寺⁷⁾（SK732：8世紀後半、SK737：9～10世紀）があげられる。しかし、類例のほとんどが回廊などに区画された中心伽藍内で、塔に近接して設置されており、檜隈寺の場合には7世紀末までに整備された回廊の外にあ

り、塔から104mも離れている点に問題が残る。それでも、現状では回廊の存続年代が不明であること、平安後期であれば檜隈寺では十三重石塔が中心的な存在とみられることから、塔の中軸線は基準の有力な候補と言える。

②金堂・講堂の中軸線対称位置

SX950の柱間中心から西側12.5mの位置には、金堂・講堂の南北中軸線（北で西に23～24°振れる）が通る。したがって、このSX950から中軸線対称位置（未発掘地）に幢竿を想定することが可能であり、そうすると2本の幢竿で、東側の1本がSX950に支えられていたことになる。金堂を基準とした事例としては、山田寺（SX181・182・184・185：7世紀中頃）、武蔵国分尼寺（SX94～98：9～10世紀前半、SX99・100：8世紀後半）などがあげられるが、これらは金堂前庭部に配置される事例である。SX950は金堂背面側に位置するうえに、金堂（中心）から72mも離れている。しかし、一般的な寺院では金堂と軸線をそろえる建物として南門があり、南門周辺に幢竿支柱遺構を確認した事例もある。山田寺（SX604・615・621・624：7世紀中頃、SX605：7世紀末頃）、新堂廃寺⁸⁾（7世紀後半）、美濃国分寺（P1・2：10世紀前半～中葉）などがあげられる。これらの事例を今回にあてはめると、中心伽藍外であることや、金堂から距離が離れることについて条件が適合する。金堂背面の南方に南門を想定することになるが、今回SX950が検出された調査区の東隣接地は、小名（小字）「チウモン」と呼ばれる。



図185 平城宮第二次大極殿復原幢竿支柱

5 まとめ

今回の調査成果は大きく以下の2点にまとめられる。

第一にA区で検出した石敷SX935と素掘溝SD940は、ともに出土遺物から7世紀前半以前のものと判断でき、7世紀末までの伽藍造営以前の様相を解明する上で重要な遺構である。特に、素掘溝SD940は過去の調査で検出されている素掘溝SD870やSD886とともに、丘陵東側斜面の区画にかかわる可能性がある。

第二にB区で検出したSX950は、7世紀末までに整備された伽藍造営以後の様相を解明する上で重要な遺構であり、重要文化財「於美阿志神社石塔婆」にかかわる可能性があるとともに、近年徐々に数を増やしている幢竿支柱事例を加えることができた。特に、檜隈寺中心伽藍南方での明確な寺院遺構の検出は初めてで、その意義は大きい。もともと今回のSX950を検出した土壇状の高まりは、かねてより門の存在が推定されてきた地点である。檜隈寺は中門を含めて西を向く特異な伽藍配置であるが、伽藍主軸の方位の振れなどは、狭い丘陵上の立地に制約された面が強いと考えられる。その中で、丘陵南側だけは平坦な地形がつづき、中心伽藍へは南方からが利便性が高い。今回の調査により、土壇状の高まりにはSX950以外に遺構は確認されなかったが、幢竿支柱の計画がいずれの堂塔に基準があったとしても、中心伽藍南側からの動線を荘厳する装置であった可能性がある。未調査であるSX950の金堂中軸線対称位置や現在の里道下などの調査によってあきらかになると考えられる。（黒坂）

参考文献

- 1) 『武蔵国分尼寺跡Ⅰ 平成4年度発掘調査概報』国分寺市教育委員会、1994。
- 2) 『美濃国分寺跡 ―国分寺遺跡（伽藍南面隣接地の調査）―』大垣市教育委員会、2005。
- 3) 『重要文化財窪八幡神社修理工事報告書』重要文化財窪八幡神社修理委員会、1957。
- 4) 『日本最古の石鳥居群は語る』東北芸術工科大学文化財保存修復センター、2008。
- 5) 『重要文化財四天王寺鳥居修理工事報告書』四天王寺、1998。
- 6) 『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所、2002。
- 7) 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XX』国分寺市遺跡調査会、1994。
- 8) 『新堂廃寺 大阪府埋蔵文化財調査報告 2000-1』大阪府教育委員会、2001。